



# 小特集に寄せて（小特集：近世文芸の作者の`姿勢（ポーズ）、：序文を手掛かりとして）

有澤，知世

---

(Citation)

國文論叢別冊, 1:1-2

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483219>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483219>



■小特集 近世文芸の作者の『姿勢』——序文を手掛かりとして

## 小特集に寄せて

有澤 知世

作者は、どこにいるのだろうか。

目の前の物語や歌が、個人にせよ複数の人物にせよ、誰かの手で書かれたということは間違いなく、作品を創り出した身体を持つ「作者」は確かにいる。しかしその「作者」と、署名や自序により作中に現出する「作者」とは、同一とはいえない。

長島弘明が、作品ごとに別の人物に変貌しますます作者を「変装する〈作者〉」とした上で、様々な号を使い分けた秋成に注目し、「もちろんどの〈作者〉も秋成の分身であるが、ともすれば誤解しがちなことだが、異なつたそれぞれの〈作者〉の総和が秋成であるわけではないということである。(中略)〈変装 こそが〈作者〉のすべてであり、この〈変装〉が解かれる時には、〈作者〉も作品世界も同時に消滅するといつてよい」と指摘するように、読者は、作品を綴つた「作者」の身体と完全に対応することのない〈作者〉像を見ているのであり、どのような〈作者〉像が示されているのかということが、作品の在り方を考える上で不可欠なのである。特に、一人の人物が名前を使いわけながら多様なジャンルの作品に筆を染める近世期においては、その位相は複雑である。

作者は、雅俗にわたる文芸、営為の中に自身の作品を位置づけないが、その位置にふさわしい姿勢をとっているのであり、我々は、作品とともに〈作者〉の虚構性について意識的にならなければならぬ。

飯倉洋一が『春雨物語』の虚構は序文からすではじまっております、『春雨物語』各篇の語り手同様、序の書き手も秋成によつて設定された虚構の人物である、という考え方も成立しうる」と述べたように、〈作者〉のふるまいを考える上で、序文の虚構性は重要な手がりとなるだろう。

神戸大学文学部国文学会では、本特集に先立ち、シンポジウム「近世俗文芸の作者の『姿勢』——序文を手掛かりとして——」(二〇二二年八月二十七日(土)、於神戸大学六甲台第二キャンパス、Zoomによるハイブリッド開催)を開催し、演義小説、読本、狂詩・狂文、草双紙といった俗文芸の序文を切り口に、五名の登壇者による報告を行い、作者の姿勢について議論した。

本特集では、登壇者による小論文に、日本漢詩文について的小論文を新たに加え、当時の知識人らにおける雅俗観や作者の虚構

性といった問題について、ジャンル横断的に検討する。なお、シンポジウムにおける議論が俗文芸の問題にとどまらなかったこと、また、今回新たに儒者による漢詩文についての論考が加わったことをふまえ、本特集のタイトルからは「俗」を除き、「近世文芸の作者の『姿勢』」と改めた。

各執筆者の問題意識に基づき、多様な事例をあげて考察する中で、近世人にとっての古典意識の在り方が共通の話題として提示され、近世文芸が型の文芸であることが改めて示された。序文を論じるためには、通史的な分析を行い、精読の上型との差異を見極めることが必要であるとする提言（天野論文）は、序文以外の研究にも有益である。

また、先行する作品や人物を、作者たちがどのように血肉とし、創作物の中で寄り添ったり逸脱したりしたのかということも重要な論点である。本特集では、古典・古人に自作・自己をなぞらえた雅俗の序文に注目し、現実世界における自己像と生き方を探る創作行為の在り方（山本論文）、先達に倣いつつも、創作のモチベーションを公から私へと転換させた新しい『姿勢』（丸井論文）、型を使いこなすことで戯れる主体としての個の在り様（小林論文）が論じられた。

本特集が問題とする作者と〈作者〉の関係性については、実体と完全には重ならない、創造物としての序者や作者の存在をふまえた上での作品読解が示され（飯倉論文）、また、作者の実態からは一定の距離を保つ〈作者〉の存在により、作者の生活の〈実〉と〈虚〉を確立させる意義が論じられた（有澤論文）。

各論考は異なる時代・ジャンルの事例を扱いながらも、問題意

識が重なり合う部分もあり、全体を通して、近世人にとっての執筆行為とはどのようなものであったのか、また「近世的自我」の在り方とはどのようなものであったのか、という大きな問いが浮かび上がってきたことは、大きな成果である。

本特集が、ジャンルや年代といった近世文学研究上の枠組みを超えて、〈作者〉、そして創作という営為について考える機会となることを願う。

## 注

- (1) 長島弘明「変装する〈作者〉——上田秋成の小説を例として」ハルオ・シラネ・鈴木登美・小峯和明・十重田裕一編『〈作者〉』とは何か——継承・占有・共同性』岩波書店、二〇二二年
- (2) 飯倉洋一「『春雨物語』序文考」『秋成考』（翰林書房、二〇〇五年）

（ありさわ ともよ／神戸大学講師）